

# 唐崎再考

「唐崎祓え」の再認識

高倉 瑞穂

## 〔抄録〕

唐崎は古代より日本海側からの海上交通の要所として、そして祓えの霊地として多くの作品に記述が見える。山王日吉大社の起源としても描かれるこの地は、平安時代には天皇や宮中周辺の人々などをはじめ多くの人々が、身の穢れを祓うためや『蜻蛉日記』のように、憂き身から脱却するための物詣の一環として足を向けさせる。そして中世以降は、神仏習合の高まりから仏教とも結びつき、唐崎の信仰はさらなる発展を遂げていく。現在では「七瀬の祓」として難波などとともに入口に膾炙される。ところ

が唐崎を描く作品を見たとき、こうした一点からでは唐崎を忠実に捉える事ができず、いまだに「七瀬の祓」にも揺れがあることから、古代・中世期における位置がはっきりしないままでいる。本論ではこうした唐崎の捉えられ方を先行研究による示唆を踏まえながらも再検討し、唐崎というものを再認識するものである。

キーワード 唐崎、唐崎祓え、『蜻蛉日記』、日吉大社、秘密社参

## 一 はじめに

唐崎という場所は古くから人々の意識の中に存在してきた。古くは『万葉集』にも詠み込まれており、日本海側からの海路運搬における重要な要地であったことが指摘される。この唐崎から山城、そして難波の方へと運ばれて行ったのである。しかし同時に唐崎は祓えの要地

とされ、時代が下るにつれその重要性は増してくるようになる。平安期に執筆された作品にもその様子が描かれ、『蜻蛉日記』『源氏物語』『宇津保物語』などはその代表例であろう。唐崎は近江国坂本に鎮座する日吉大社との関係が諸書にも述べられているように、唐崎と山王日吉大社の関係は切っても切れない関係にある。現在、山王神道方面から、また日吉大社にまつわる山王関係の史料にあたることにより

数々の研究が発表されており、唐崎像というものはある程度明るくなってきたように思われ、さらに唐崎における祓え「唐崎祓え」についても歴史的祓えの変遷を辿ることにより解明されてきたことは多いものの、唐崎についてとりわけ古代・中世期に限ったとしても、未だにその位置がはっきりしていない。本論ではそうした唐崎の古代・中世期における捉えられ方を先行研究による示唆を踏まえながらも再検討し、現代からの唐崎の捉え方の一視点を再認識し、明らかにしようとするものである。

## 二 古代の唐崎祓えの実際

平安期における「唐崎祓え」の例としては、『蜻蛉日記』中巻天禄元年（九七〇）の、

かくながら二十余日になりぬるこち、せむかた知らず、あやし  
くおきどころなきを、いかで涼しきかたもやあると心ものべがて  
ら浜づらのかたに祓へもせむと思ひて、唐崎とてものす。

と夫・藤原兼家の夜離れを憂えて浜辺へ、すなわち唐崎へと祓えをしに行こうとする部分が指摘される。個人が祓えをする時、近隣の御手洗川等を選ばず、離れた近江唐崎へと祓えに参るその心情には平安期を生きた女性の決して逃れることができない苦悩が読み取れる。この道綱母の唐崎祓については、この旅が兼家との思うようにならない関係性から自己を解き放つことを目的としており、神楽歌や屏風歌などの伝統的な和歌世界を本心を韜晦する手段として用いながら、仮構の明るさに満ちた逃避世界の唐崎祓えはその無意味さの認識によって、

兼家との関係という逃れられない現実を見つめていく過程であるという位置付けがなされる。そのため、先行研究の多くには、この旅自身もそうした現実から逃れる手段として物見遊山が前提であることを述べられているものが多い。今回霊地としての唐崎像を見るためそうした『蜻蛉日記』研究に乗った道綱母の細かな信仰心についての言及は避けるが、本文に述べられる「心ものべがてら」に表象される嘆きは、物見遊山という言葉以上に唐崎という地へ足を向けた現実が存在するのだと考えられる。道綱母がとりわけ唐崎を選択したことを念頭に、数ある物詣記事との関連も併せた深い検証がさらに必要になるだろう。ここでは宮中周辺の女性日記である『蜻蛉日記』を用いて、唐崎の意味づけを再度試みたい。

一部ではあるが『蜻蛉日記』における唐崎の説明について各注釈書の語注を確認すると以下のごとく表すことができる。各項下部には抜き出した書名を記載してある。

大津市坂本の琵琶湖岸。難波とならぶ著名な祓所。六月祓をしに行く。

（『新日本古典文学大系』）

琵琶湖の西浜にある崎。滋賀県大津市。祓所としての七瀬の一つ。

（『新編日本古典文学全集』）

琵琶湖の西岸、大津市下坂本に突き出た岬。

（『新潮日本古典集成』）

滋賀県大津市下坂本の琵琶湖に突き出た小さな岬。

（柿本奨『蜻蛉日記全注釈』）

琵琶湖の西岸にある崎。滋賀県大津市下坂本。

(上村悦子『蜻蛉日記全訳注(中)』)

これらの「唐崎」注では共通して、地名としての唐崎(現在の滋賀県大津市の琵琶湖南西側にある地)が示され、また同時に岩波『新大系』や小学館『新編全集』では同じく祓所として有名な難波やそれらを含めて有名な祓所として指定されていたことが指摘されている。さらに『新編全集』ではその有名な祓所を「七瀬」とし、唐崎はその一つであるということが語注として掲載されている。確かに唐崎は辞書レベルの記述では「下阪本の南端、穴太の東、琵琶湖に面した崎で、古くは七瀬祓所の一つとして知られる。辛崎・韓崎などとも記され、渡来人にかかわる地名」とされる<sup>②</sup>。また、『大津市史』によると古代唐崎においては、天智天皇による大津京遷都の影響による渡来者の集住や、大友皇子たちとの密接な関係があるのではないかと考えられている<sup>③</sup>。実際、平安時代には天皇の御幸の記事も見受けられ、『日本紀略』には桓武天皇の唐崎御幸の記事として、延暦二十二年四月九日、同二十三年三月二十四日に「幸近江國志賀可樂崎」の記述も見られ、のちの嵯峨天皇にしても天皇の唐崎行幸は度々行われることが確認できる。

さらに「七瀬」についての起源や古代における諸相は既に先行論文でも取り上げられている。例えば『源氏物語』落標巻における光源氏の住吉詣の帰途での文中に、「七瀬」という言葉が出てくることや、少女巻で五節の舞姫の父である近江の守・良清と津の守・惟光がそれぞれ<sup>④</sup>の任国において娘に祓をさせている。これらについて三谷邦明氏、

吉海直人氏は『源氏物語』を出発点として「七瀬」および「七瀬の祓」についての考察を述べられている。三谷氏は、

幾つかの源氏物語の注釈書が誤っているので付言すれば、「七瀬」とは地名ではなくて七瀬の祓のことで、これは公事の一つで、毎月又は臨時に吉日を卜して、天皇の災禍を負わせた人形の撫物を、七つの川の瀬に、各々一人を遣わしてさせる祓を言い、其の場所は大七瀬と言われる。場所は難波・農太・河俣・大島・橘小島・佐久那谷・辛崎であつて、田中卓の研究論文によれば、難波・農太・河俣の三ヶ所は共にその地を田簀島という場所に置いているという。七瀬の祓は江戸幕府でさえ行われたというが、その七瀬の祓は実は八十島祭の小規模なもので、大嘗会に際して行われる八十島祭は、大嘗会に於ける七瀬の祓に他ならないのである。つまり、七瀬の祓中、難波の田簀島の祓は最も重要なもので、それ故、そうした天皇の禊の場所であるこの田簀島の七瀬は、一般には祓が出来ない場所であつたと考えられるのである<sup>④</sup>。

と述べておられるのに対し、吉海氏はこうした三谷氏の指摘に『源氏物語』における「七瀬」の重要性は三谷氏の論により初めて指摘されたと評価され、その上で、「七瀬の祓」と八十島祭の小規模なものとする<sup>⑤</sup>ことに、祓としての類似性はともかく陰陽師の職掌である「七瀬の祓」を神祇官の職掌である八十島祭と合わすことが果たして出来るか」ということと、「七瀬」の場所についても、「大七瀬」にしか言及されていないのは何故であろうか。」と「七瀬の祓」に関する詳しい考察を図られている。平安時代中期には、貴族社会において陰陽道

関係の諸行事等が身近に浸透し、賀茂保憲や安倍晴明ら官人の陰陽師だけでなく民間にも陰陽師が活躍し始めた。この陰陽師らは祓や祭祀等の様々な宗教行為を執り行い、「いわば僧侶につぐ第二の宗教者として貴族社会の呪術的な現世利益の要求に応ずる存在」であつたという<sup>⑤</sup>。これを念頭に置くと、既に確立された宗教者集団として認識される陰陽師が、神事をも兼ねているという点には疑問が生じるが、古くは『万葉集』から「七瀬」と書かれるこうしたその現場での祓行事、「七瀬の祓」自体は平安時代中期以降になるとされる。中古文学作品に限定しても唐崎祓えは、『源氏物語』以外にも『蜻蛉日記』をはじめ、『宇津保物語』『小右記』『御堂関白記』などに見られるものである。「七瀬の祓」の概念が平安時代中期において宮中周辺の人々にとつてもかなり身近なものであつたことがうかがえる。吉海氏はさらに、もともと「七瀬の祓」は、村上天皇以降に賀茂保憲によつてはじめられた陰陽道の行事のようだが、それが毎月あるいは各月に七箇所できちんと行われたとすれば、その度毎に延べ七人もの陰陽師が要請されるわけだから、少なくとも陰陽師達の存在価値は十分に高められたであろう。そうでなくとも宮廷行事から公家の私的な祈禱としても行われ、それが「洛中・霊所・大」と三種に拡大されたとすれば、陰陽師の必要性は一層増大したはずである<sup>⑥</sup>。と述べられている。この事実を踏まえると当初公式の国家行事であつた祓えが、徐々に民間にまで広がつていったことにより、それぞれの祓えの地として人口に膾炙されていた場所が、次第に固定化され、そして伝播されていったと考えられる。そのため「七瀬の祓」、またそ

の中の祓所について考えるとき、洛中七瀬・霊所七瀬・大七瀬などといった時代による祓場所規定の変化を念頭に入れ、七瀬の変遷にはそれぞれの時代に定着した祓場所があるということを無視することはできない。そのため唐崎の古代での認識としては、祓えの場としてはともかく、七瀬の祓所としての認識ではないのである。山上伊豆母氏が、

平安期の『七瀬祓』の記録に共通した特色は、いずれも中世以降の七瀬祓概念である（七箇所祓）という内容が欠如している点であり祓地『七所』の総地名が現れないことである<sup>⑦</sup>。

と述べられているのは、そもそも「七瀬の祓」として場所が決められ定期的に祓えが行われる意識が、平安時代以降中世に入ってから発展していったことになる。また山上氏は、以下四つの七瀬の祓所を挙げられた上で、それらの変遷を以下のように述べられている。

一（洛中七瀬）河合・一条・土御門・近衛・中御門・大炊御門・二条末

二（霊所七瀬）河合・耳敏川・松ヶ崎・石影・東滝・西滝・大井川

三（大七瀬）難波・農太・河俣・大島・橘小島・佐久那谷・辛崎四（鎌倉七瀬）由比浜・金洗沢・固瀬河・六浦・抽河・杜戸・江島

この先後関係を考えるならば平安末の『霊書』よりも、同記の『賀茂川の七瀬』がふるく、鎌倉初期ころ七箇所の祓所地名としての『七瀬』がさかんとなり、『霊所七瀬』、『洛中七瀬』（賀茂川の七瀬の後身）『鎌倉七瀬』がならんで行われるようになったと

考えられる。『大七瀬』はおくれて南北朝ごろ定められたのではあるまいか。『鎌倉七瀬』が『洛中七瀬』の全地名よりむしろ早く文献に見えるのは、京・鎌倉を往来した陰陽師の活躍によるものであろうとわたしは考える。要するに、平安朝の『七瀬の祓』の本態は賀茂川の瀬々の禊祓であつた<sup>8)</sup>。

とされる。少なくとも平安期、『蜻蛉日記』や『源氏物語』が執筆された頃には、「七瀬の祓」として京周辺の祓え場の認識はあつたとしても、唐崎自体が七瀬の一つとして認識されてはいない。この地への信仰は七瀬の祓の一つとしてではなく、当時この場所自体に信仰が集まつており、それを捉えていかなければならないのである。十一世紀ごろには既に祓えの霊地として一般化していたことは注目され、後世の七瀬の祓所として認識される源流が、この時代の唐崎での信仰である。また唐崎は祓えの場であるとともに、さらに神事として賀茂社に奉仕する齋院が退下する際、唐崎禊として潔斎する場とも言われている。『源氏物語』の注釈『花鳥餘情』にも五節の舞姫が唐崎に向かう場面の注釈として、

前齋宮帰京の時は於難波有祓前齋院退出之時は於辛崎修祓これみな神事をとく解除なり五節の難波からさきのはらへこれに思ひなすらへ侍り

とある。これは『左経記』長元八年四月の記事、「廿五日戊寅 天晴、午剋許参先齋院、女房云、去齋院給後、須任先例、於辛前可有御祓也」とあるのが、記録に見られる最初の例とされる。さらに『西宮記』には「齋王入京事」として、

依吉事入京、用初道。依官符造頓宮。遣奉迎辦一人。加六位一人。史歟。王並中務丞・内舍人二人・檢非違使二人・看督、任河陽。向難波唐崎有宣言

と記されているように、京に至るその過程で難波や唐崎において禊をし、穢れを除くとする。齋王が近江から入京する際には唐崎で禊をするというのが通例となっていたのだろう。ところが一方で同じ『西宮記』齋院の条においては解除の際の祓え場所として「向東河解除」とあり唐崎の明記は無い。延喜五年四月十八日賀茂の齋院恭子内親王は「禊鴨河入野宮」、延暦十七年四月十六日宣子内親王も「臨鴨河禊」とし、ともに賀茂川においての禊を記録している。齋院として最初に二回の禊を行う（「初齋院二度禊」）としているが、場所は基本的には賀茂川で行われていたということだろう。結局は、こうして齋院達が禊を行っていた場所が「賀茂川の七瀬」に連なる地名となっていた。

このように古代において唐崎は神事・唐崎禊として潔斎する場としての性格と、平安京周辺の人々が祓えに赴き、陰陽道の宗教行事を行う場としての二面の性格を持つ霊場だった。ところが、「祓え」と「禊」は平安期においてはしばしば混同されるようになり、『宇津保物語』で桂河原で行われた夏神樂と六月祓を同時に行つた例も指摘される。本来一年を半分に分けて二回行われる宮廷行事としての大祓は、国家が国民の罪汚れを代表して行うものとして姿を見せていた。それが徐々に一般的になり、民間にも浸透するにつれて、十二月の祓えはついに消滅し六月の祓えのみが残り、個人でも祓場所へと赴くようになった<sup>9)</sup>。この点は現代での祓えと大差ない。水辺に赴き自らの憂いを



形代に託し、水へと流すこの一連の行事は、中世までは必ずしも晦日ではなく、六月中のいずれかの日に祓を行うとされていた。祓えをする人間が、祓を六月中に行うことは意識下に当然あったであろうが、日付などは特に厳密に捉えられておらず、場所も水辺であれば特に指定されないという流動的性格が根底に存在するのである。

『蜻蛉日記』で行われる唐崎祓えも、本質的には道綱母が兼家の夜離れにおける精神的脱却の願いが根底にあったことは、既に先学が述べられている。ところが、とりわけその唐崎という場所において祓をしに行くという意識の裏付けを、その場所の信仰と密接な関係からはずきりさせていないことが、未だ唐崎の位置を定めさせない要因となっているのである。場としての唐崎の認識と、祓えそのものに対しての認識の揺れが、今に至っても「唐崎祓え」という一つの行事さえも捉えにくくしているようである。少なくとも古代において唐崎は七瀬としてではなく、あくまで以前より信仰の場として根付いていた祓えの霊地としての意識が、人々にはあったと考えられる。その点からも冒頭に挙げた諸注釈書類の唐崎注を見たときに、『新編全集』で書かれた「七瀬の一つ」などと安易に共時態的に表現することは、当時の唐崎像を誤解してしまう恐れがある。また海路交通の要所としての唐崎として立地的優位性のみを指摘するだけではなく、唐崎という霊地そのものについての性格も知ることが不可欠である。とりわけ『蜻蛉日記』の唐崎祓えを考えると、道綱母の唐崎祓えは天禄元年六月下旬であり、自らの穢れを祓うための六月祓え（水無月祓・名越祓・夏祓とも表記、呼称される）の一環であると考えても差し支えなからう。

それは先述したように、道綱母が「七瀬の祓」の地である唐崎へ行くというのではない。自らの憂き身を祓うために、とりわけ祓え場所として認識されていた霊地唐崎に赴くべきだという思考が根底にあるのである。唐崎は中世にかけて日吉大社の山王神道と相俟ってさらなる信仰的発展を迎えることになる。三谷氏・吉海氏の論でなされた「七瀬の祓」の論考の先に、唐崎の存在意義、祓えが行われる精神的根拠となるものの詳細を考えなければならないだろう。そこで、唐崎の起源や神仏習合の面からも記録されてきた記家の書物などを見ることによって、唐崎の諸相を確認したい。

### 三 中世における霊地唐崎の諸相―秘密社参の唐崎記述―

国家の祓えが唐崎祓えとして徐々に民間にも伝播していったその場所として、霊地・唐崎が生まれた背景には何があるのか。それは山王日吉大社と密接な関係で結ばれていることは既に明らかになっている。最終的には、内域に限っても百八社も数えられた日吉大社であるが、唐崎はその摂社として存在することは知られているところである。十世紀に入ると将門の乱の平定のため、当時の天台座主義海の手で日吉社に根本多宝塔が造られ、その傍に根本想社が勧請されて日吉社の中心になった。持統朝期に創建されたとされる唐崎神社が、本格的に発展をしていくのはちょうどこの時期である。

古く日吉大社は比叡山延暦寺との関わりが深く、織田信長による比叡山焼き討ちに遭うという憂き目を見たものの、中世期には神仏習合を経て相互的形成発展を遂げてきた。そのため唐崎、また唐崎明神に

ついで姿を見ようとすると、このような山王、比叡山信仰に関する史料を探らなければならないのであるが、現在その起源を探ろうとした時、記家による伝承から探らなければ唐崎の姿を正確に捉えることは難しい。それは歴史・事象といったその内容が、秘伝という名のもと、書承されて後世に伝わっていくのではなく、まさに口承によりそれらの伝承が伝わっていくという特殊な形態が取られたことに他ならない。記家とはいわゆる「記録」を記録とし、それを専門とするものと同時に、広く顕密諸経に関する口伝秘訣の類をも記録として、それを得意とする口伝主義の学者のことを指す。つまりは比叡山の記録故実を得意としてそれを専門とするものの、彼らは単なる記録者ではなく、記録故実のそれらに秘義を認め口伝を説いて、これが相承伝授されて学問の対象とし、仏道修行の要諦とした者であったという<sup>10</sup>。こうした記家は平安時代末期の頃より登場してきたとされ、例えばその内容として、山王神道典籍である光宗の『溪嵐拾葉集』に記録部として残されている。現在一般的な日吉大社、また唐崎についての記述は、滋賀県の地誌であり、享保十九年（一七三四）頃に成立したとされる寒川辰清の『近江輿地誌略』を見ることで、その概要を知ることができる。これには「『日吉記』云」として、唐崎神社創建について琴御館宿禰という人物の名を挙げ以下のように述べられる。

社務上祖琴御館宇志丸宿禰、自常陸國鹿島上洛、江州志賀郡三津濱居住之處、號之唐崎云々。又云、天智天皇白鳳二年三月上巳於大津與多崎八柳濱有臨幸。于時湖上漁舟有田中恒世者。神命恒世使送唐崎松下、於船中恒世供粟飯。神甚有喜色曰、自今為汝每歲

卯月中申日可臨幸于唐崎。

琴御館宇志丸宿禰は常陸より移住し、志賀郡三津浜に移り住みその場所を「唐崎」と名付けたとされ、近世期にはこのような話が由緒として認識されていた。この底本となったものが、日吉神社の縁起を説く山王関係書物であることは確かであるが、そうした書物の一つである『耀天記』には「大宮御事」として、

両説在之、康和五年十二月、愛智庄官符稱、御神者、大八島金刺朝廷、顯三輪明神、大津御宇之時、初天下坐云云、尋本跡。天照太神分身。或曰枝。或申日吉。是則垂迹於叡岳之麓、旋威於日下故也、彼明句云、欽明之秋天、三輪月影潔、天智之春候、八柳風音涼云云、欽明天皇御宇大和國垂迹、天智天皇御時此所渡御、先琴御館宇志丸住處唐崎、渡御、宇志丸被仰云、為我氏人、可令社務於我實殿者、自比西北可卜勝地、結草之所以為其驗、建立寶殿、可致禮奠云云、仍宇志丸即随神勅、指西北尋之處、有粉楡之所、仍以件處為注、奉造寶殿處所奉崇也、則是今大宮寶殿是也、

とある。天智天皇の御時、大己貴神が唐崎に影向し、唐崎に住む宇志丸の家に來た時、鎮座に相応しい場所を見つけよと仰せられた。その結果、唐崎の西北の地に存在した適切な場所が、今に言う大宮寶殿だと述べられる。これが日吉大社西本宮鎮座への最初の縁起として収録されている話であるとされ、鎌倉時代初期には既に靈地としての姿を見せている。さらに、

昔宇志丸者、山末社は也、今社司等者、彼末葉也云云、自大和國、志賀浦唐崎濱渡御之時、大津西浦田中恒世船奉載、唐崎琴御館宇

志丸之住處、奉送付畢、於其處、田中恒世奉浦栗御飯之刻、被仰云、於汝等者、為我神人、毎年出御之時、必可奉供御云々、初依栗御料獻、于今無改也、

と田中恒世が栗御飯を振る舞った一連の話が載せられる。これらの話は山王関係史料に多く載せられている唐崎と日吉を結ぶものであり、細部が相違する場合もあるが、大きくは一致している。琴御館宇志丸という人物は、後で述べる三祝部のうちの一人でもあり、日吉社々家の始祖とされる。社伝では常陸の国司であつたものが唐崎に移り住んだと書かれている。大三輪神は大己貴神の和魂であり、ここではその大三輪神が唐崎に臨幸したことがそもそもの発端となっている。

さらに、唐崎は中世にかけて霊松とともに日吉大社起源の舞台となつていったが、一方で山王秘密社参と呼ばれる宗教行事があつたことに注目しなければならない。秘密社参は特に夜間、日吉大社の末社・摂社をそれぞれ巡拝するという、中世期以降広がりを見せる宗教行事である。比叡の回峯行とその活動位置や形態などから区別され、回峯行が山上を巡るのに対し、秘密社参は山下に存在する神祠仏堂などを巡る宗教行事である。現在では残された史料の少なさから、創始や中世期の様子など、詳細に不明なものも多く、解明には困難を極める。秘密社参は元亀以降江戸時代末期あたりまでは盛んに行われていたというが、もつとも回峯行においても相応和尚供養から始まり、その後姿を変えつつも三塔巡拝として、比叡山の氏神である日吉大社にも参拝に赴いていた。このことから、秘密社参は回峯行発展後の中世期において広がり、神仏習合に支えられて行われた神道行事であると結

論づけることができるだろう。

唐崎はその秘密社参の初参場所として儀礼が行われていたという記述が残っている。『日吉山王秘密社参次第記』には「到唐崎湖水灑身清浄祓」とあり、秘密社参前に唐崎祓えをすることが述べられている。これはつまり秘密社参における初参場所として位置付けられることになり、その祓えには五色の棒幣を使用することも言われている。「尋常之社参者先王子宮次早尾塔下参大宮聖真子客人歷中路参下八王子二宮十禅師次八王子三宮」とあり、普段多くは王子宮から始められていたという。ところが、同書「王子宮恒例社頭最初参向者口伝」の項には「秘密社参次第王子宮、早尾塔下次大宮聖真子客人宮歷中路下八王子向次二宮十禅師八王子三宮云云元来惣社参之刻為唐崎最初口伝可尋導師云云」とあり、秘密社参の簡略化と言えば言いすぎかもしれないが、重要な秘密社参においては唐崎初参で始まるものの、通常の社参および秘密社参は王子宮から始まるとされる。中世以降織田信長による比叡山焼き討ちで憂き目を見、日吉大社の中興として活躍し宇志丸の子孫である祝部行丸などの記録によつても、王子宮が初参場所である記録が残っており、秘密社参の初参場所が唐崎であることは必ずしも言えることではない。しかし、本来的に秘密社参を唐崎で始めることは、嵯峨井建氏が「祭祀の始源は琵琶湖上にあり、湖から山麓に至るキーポイントとして、唐崎が位置づけられる」と述べられることに他ならないのであり、重要な社参時に唐崎を初参場所に定めていたのも、日吉大社に至る玄関口として唐崎が、清浄なる聖地であり続けていることの裏付けとなるものであろう。修行という名目のもと唐崎に人々



が赴いていたことは古代宮中周辺の人間が憂き身を祓えにやって来た時代に比べ、より宗教的な霊地として人口に膾炙されていたことになる。

秘密社参においては、その名の通り「秘密」であることが前提であるため、その内実に関する情報は秘事とされていた。その中で『日吉秘密社参加多羅比』と呼ばれる記録の存在がある。<sup>(14)</sup>『日吉秘密社参加多羅比』(以下、『加多羅比』と表記する)は秘密社参の道中、書承でない巡拝に関する深秘の内容を演説し、それを書き留めた口伝様の説明が伴う記録である。<sup>(15)</sup>「唐崎大明神」と題されたこの記述にはまず冒頭部に、

昔時大津ノ宮天智天皇毎歳季夏晦日行幸此祓殿而修玉フ名越ノ祓矣今ノ乃水無月會其ノ遺法ナリ也

と唐崎における名越の祓、また水無月祓は天智天皇がこの地に行幸し、禊を行ったことからの名残であることが最初に述べられる。そして、

天智天皇即位元年春三月上巳和州三諸山大三輪大神大津降臨玉八ツ柳濱矣于時湖上有二艘漁舟一人天晴光一人粟津田中恒世大神召曰汝令到我幸崎松之下哉即被召漁舟恒世勅曰我可惠齊忌御料哉恒世答云漁舟中無好物黃楊小箭中有粟飯獻上味也然而恒世掉漁舟而直着孤松之下大神忽現神通力漁舟引上於松之梢依之恒世智神仮現恐謹神亦勅曰乗船之送粟御料懇志至矣汝為報謝每歲卯月二申日可神幸此松精神海童命出現於湖上妙相裙帶翻春風也大神問曰如何化人哉尊神答曰我是唐崎神海童命也

とあり、大三輪神が大津に臨幸した際に田中恒世という者が、唐崎の

松の下で粟飯をもてなすなどという唐崎での出来事を表し、内容的には『耀天記』などにも記された記述に近い。『加多羅比』ではさらに日吉山王の祭祀に奉仕する三祝部についての記述がされており、これがいわゆる紀祝部・琴祝部・登美祝部であり、「天智朝仕官而此祓殿為神官也」とされる。秘密社参という名の通り、その内部の詳細は秘密事項とされ、規定の上での伝授でのみ知られるもののみ知らされるものであった。そうした中で、『加多羅比』が記述される内容は、時代の下る近世期以降のものであるとはいえ、口伝における事項が記された貴重な資料になる。

ところで、『日吉山王秘密社参次第記』において「松精神童女現」として湖上に現れた童女が唐崎に到り、それが唐崎明神の祭神海童命であるのだが、その際に「湖上常五色波起其聲唱一切衆生悉佛性如来常住無有變易」と「五色の波」が湖上に湧き起こったという。社参の次第を綴る冒頭部の唐崎祓えにおいても「五色の棒幣」を使用するところが記載されており、古くより山王祭において、天台座主以下の一山僧侶による五色奉幣の儀が執り行われていたという。<sup>(16)</sup>湖上に祭神である海童命が現われる表現は『加多羅比』にも「湖上常五色波起其音唱一切衆生悉有佛性如来常住無有變易之文源流自是有」と同様の表現がみられる。ここで述べられる「五色」とは本来仏教でいう青・黄・赤・白・黒のことであり、平安時代には臨終に際して五色の糸を阿弥陀仏の手から垂らし、それをつかんで浄土に導かれることを願うという風習もあった。<sup>(17)</sup>神道でも五色の奉幣のように五色が用いられるものの、根本的には仏教の影響であり、これらの記録によるものは多分に

比叡、天台仏教を意識し、強調したものであると思われる。

ちなみに、中世も終盤にさしかかる一六世紀に制作された近江の薬師古刹、桑実寺の『桑実寺縁起絵巻』には「七光寺」を天智天皇が建立し、湖底から「金色の光」が現れ、粟津の磯辺に薬師如来が現れるという描写が存在する。仏教から解かれる縁起においても確認できる唐崎の湖面の霊験は、視覚的な面からも後世まで確かに伝わっている根拠になる。

『溪嵐拾葉集』にも「五大法性」という語に見えるが、「五大」という言葉は密教においては五色・五仏・五方位・五明・五智を配するとされており、唐崎明神の記述の中には神仏習合のもと海童命の本事仏である如意輪観音にも、光を当てる役割を担っていたのかもしれない。今回すべての史料にあたることは出来ていないが、管見に及んだ限りでは『溪嵐拾葉集』や山王関係の唐崎記述がある数種の史料でも「五色の波」の記述は唐崎の他には見ることができない。記録者が海童命の登場に、仏教語として知られる言葉をあえて使用した理由については現在では詳しく述べることはできないが、日吉大社と琵琶湖をつなぐ中継場所として、さらに日吉の根本とも言える唐崎を、神仏双方の霊地として多面的に表現したのではないか。しかしいづれにしても日吉大社・比叡山という二大寺社を舞台に広がる神仏習合の高まりの絶頂期に神道側からも身近に使われていた仏教用語を使い、神の登場を表現することは注目すべき問題であろう。

#### 四 おわりに

本稿では平安時代文学作品における唐崎の例と、中世以降の山王日吉大社との関係書物を見ることで、各時代にどのような唐崎での信仰が行われていたかを先行研究と併せながら再検討してきた。「七瀬としての一つ」ではなく、唐崎という地名を考えることにより、時代によつてその信仰形態、信仰認識も変わってくるのが明らかになったように思う。今の時代に生きるわれわれが、例えば『蜻蛉日記』のような作品を受容する上では、そうした点を考慮した上で唐崎の信仰を考えていかなければならない。こうした面からもその信仰状況は通時的態的に見るべきであり、ある一点の時代において解明されるものではない。霊地として様々な表情を持ち、平安時代頃に行われた公事としての唐崎祓えや斎院などの唐崎禊、また周辺の民間による私的な祓えや中世以降に盛んに行われる山王神道儀礼としての唐崎祓え、それが最終的にはさらに大きな広がりを見せることにより、近世以降に至つてもその地の信仰は絶えることがなかった。特に秘密社参における唐崎の位置は書き残された書物によつて初参場所として相違が見られることもあるが、それが唐崎信仰の軽視に繋がるものではまったくなく、日吉大社の根源としての位置を確立している。秘儀として日吉大社創祀の由来や霊験などを実地での「カタライ」によつて代々語り告げられてきたことは、それを裏付ける証拠と言えよう。それが徐々に民間に膾炙されて、七瀬のような明確な規定が誕生していった。

現在でも七月二十八日・二十九日に行われる唐崎神社の「みたらし

「祭」は、古代から続く唐崎祓えの系譜をもって行われているものである。広大な琵琶湖の前に厳かに行われる一連の神事を見たとき、かつて古代人たちが遙か遠方からまでもこの地に赴き、身や心を清めていた理由が肌で感じられるような気がする。日が落ちた湖上での花火神事を見ていると、その後ろからふと五色の波が立っているように思われた。

＊本論は平成十九年度卒業論文と平成二十年九月平安京文化研究会にて行った発表の内容を元に、大幅に加筆・修正を行ったものである。論文指導を行って下さった黒田彰先生を始め、古典文学を研究するきっかけを与えて下さった上野辰義先生、発表当日質疑等でご助言を賜った方々に心から感謝申し上げます。

〔注〕

- (1) 斎藤菜穂子『蜻蛉日記』唐崎祓いの意義―仮構と明るさと読詠歌―(『中古文学』第六十七号 二〇〇一年五月)
- (2) 『日本歴史地名大系二五 滋賀県』(平凡社 一九九一年)
- (3) 『新修大津市史』第一巻古代(大津市 一九七八年)
- (4) 三谷邦明『濡標巻における栄華と罪の意識―八十島祭あるいは住吉物語の影響―』(『物語文学の方法II』所収 有精堂 一九八九年)
- (5) 山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』(岩田書院 一九九六年)
- (6) 吉海直人『七瀬の祓』の再検討―『源氏物語』と史実―(『論叢源氏物語』歴史との往還 所収 新典社 二〇〇〇年)
- (7) 山上伊豆母『禊祓の本質―七瀬祓の源流―』(『古代祭祀伝承の研究』所収 雄山閣 一九七三年)
- (8) 前掲 山上氏論文による。

- (9) 江馬務『有職故実』(河原書店 一九六五年)
- (10) 裕慈弘『中世比叡山に於ける記家と一実神道の発展』(『日本佛教の開展とその基調(下)』所収 三省堂 一九五三年)
- (11) 飛鳥井舜達『山王秘密参社に就いて』(『叡山学報』一二 一九三六年七月)
- (12) 光永覚道『千日回峯行』(春秋社 一九九六年)
- (13) 嵯峨井建『日吉大社と山王権現』(人文書院 一九九二年)
- (14) 『日吉秘密社参加多羅比』は『日吉社秘密社参手文』中に所収。当該本奥付に「昭和十一年五月廿四日、日吉秘密社参執行之畢」と記されており、『加多羅比』の他二本の手文が同時に一冊として作成してある。『加多羅比』には飛鳥井氏蔵写本と記される。
- (15) 行丸の『日吉社神道秘密記』などにも類似した記事がある。大三輪神は現在の日吉大社西本宮に祭される大己貴神がこれに相当する。
- (16) 前掲 飛鳥井舜達氏論文による。
- (17) 前掲 嵯峨井建氏論文による。

(たかくら みずほ 文学研究科国文学専攻修士課程)

(指導…黒田 彰 教授)

二〇〇九年九月三十日受理